

《論文》

立教大学の形成期における大学教育理念の模索

—立教学院ミッションに着目して—

小川智瑞恵

はじめに

大学のユニバーサル化が進むなかで、大学がみずからの個性を「建学の精神」において語り、それと分かち難く結びついた新たな校風や学風を教育のいとなみから興すことが今日の課題であると言われている¹。学校教育法では、大学の目的を「學術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させること」としている。建学の精神や校風は、このような大学の目的をその歴史的経緯や今日の方針に沿って実現ししつ表現する。

本稿においては、立教におけるキリスト教運動のひとつである立教学院ミッションに着目し、立教の校風形成の一過程をたどる。『立教学院百年史』に記されているように、立教学院ミッションは、1897年に校長ティングの招きを受けて「学内宗教活動振興のために」チャプレンに就任した元田作之進によって組織された。その目的は「基督とその〔聖〕公会に奉仕すること」、学生キリスト者の活動を指導して学生を教会に結び付け、教会の伝道や教育活動を援助することであった²。会員には信仰や品性、学力において優れているものが選抜された。

立教学校ミッションが成立してから一年後に元田の示唆を受けて1898年3月に創刊され、1931年5月に300号記念号をもって終刊となったその機関誌『築地の園』は、学報や聖公会の機関誌としての役割も担った³。立教の宗教活動を「園の宗教」として報告し、そのなかにある「愛するものよ」という書き出しで始まる「園の昨今」では、クリスチャンの学生も

多く参加した文武会という立教中学校と専修科の学友会や野球部の動向、築地三一教会やそのクリスマス祝会における日曜学校などが取り上げられる⁴。「建学の精神」をあらわす言葉として知られるライフスナイダー総理の「神と国の為に」と題する文章をはじめミッション・スクールとしての立教のあり方や立教精神についてのミッション員の見解を紹介する『築地の園』は、学園に集う学生や教職員、日米の教会とのつながりのなかで醸成された建学の精神や、立教に求められた学風を今に伝える媒体となっている。

『築地の園』が終刊となった後、立教学院パンフレットが刊行された。そのうちの『立教学院宗教運動の過去及現在』は、立教学院の宗教運動とそのなかにおける立教学院ミッションを今日に伝える貴重な一冊である。ミッション員で当時立教中学校牧師であった前島潔が執筆し、立教学院において展開された宗教運動の変遷を時代背景や学生の思想的な動向との関連で捉えている。立教学院ミッションについては、その流れのなかで成立し役目を終えるまでを述べ、ミッション員の回想録を掲載する。

上記の先行研究などを基に第一に立教学院ミッションの結成の歩みを立教の歴史の中に位置づけ、第二に立教学院ミッションの使命のひとつであった日曜学校への貢献について『築地の園』に求め、第三にミッション員の立教の制度的変遷への意見とそこにみられる立教観や教育観について述べていきたい。

I. 立教学院ミッションの結成の歩み

1. 立教学校ミッションの結成まで

立教学院宗教運動の源は、立教が私塾として開かれた1874年に遡るばかりか伝道者パウロにならった創設者C・M・ウィリアムズ（Channing Moore Williams, 1829～1910）の「人格内にある」と前島潔は述べる⁵。

ウィリアムズは1880年6月30日に年度末の江戸伝道主教の報告において、青年たちがキリスト教の影響の下でキリスト教徒となれるような神学研究

課程に入学する準備がなされる高等の男子校を設立することがミッション開設当初から常に日本における最重要課題であったが、欧米諸国の学識を熱心に取り込んでいるものの「何が真理で何が偽りなのか判断できない」日本においてはキリスト教のカレッジ創設は喫緊の課題であり教会のためになると強調した⁶。この課題は、1881年に東京で開かれた在日米国聖公会宣教師会議に出席したメンバーの大半によって承認され伝道事業の徹底のために速やかにカレッジを設立するよう決議された。この決議に大きな影響を及ぼしたのは、ウィリアムズが開いた大阪英和学舎を再興し校長を務めていたT・S・ティング（Theodosius Steven Ting, 1849～1827）の論説であった。ティングは、比較的高等な官立学校で知識を身につけた卒業生は将来の聖職者として期待できない上にキリスト教や教会への主要な敵対者や対抗者となっているので、日本人のカレッジ学生に日々一時間接する聖職宣教師と外国人教授4人を配した東京大学の文学コースに並ぶ学習課程をもつカレッジを創設する必要があると訴えた⁷。

立教学校ではウィリアムズの要請によって派遣されたJ・M・ガーディナーが1880年10月に校長となり、二年後にはその設計で校舎が新築された。立教学校は築地居留地に宣教師館や三一神学校、立教女学校、後の築地三一教会となる立教教会の一群のなかにその位置を占め、1883年1月23日には立教学校を閉業して立教大学校として発足した。ウィリアムズは寄宿舎に学生と共に暮らし、立教教会や深川真光教会、浅草講義所を牧会し、伝道した⁸。このようなウィリアムズの軌跡と立教の歩みは立教学院ミッションのミッション員の活動へとつながっていく。

立教大学校の設立を見た後、1889年にウィリアムズが主教を辞任、同年、学生による立教の学制改革運動が起こり、その結果として校長にティングが就任する。立教学院ミッションの結成にはこの一連の出来事が大きく影響する。ミッション員である貫民之助（1882～1961）⁹は1908年1月に水戸で執筆した「立教学院小史」において、「明治16〔1883〕年の春、新校舎の落成と共に茲に立教大学校の名を以て開設するに至れり。之より先

ガーデナー氏は校制を米国のカレッジ組織となすの故を以て大学校の名を蔽らしめんと欲し、貫〔元介（1851～1890）、初代立教学校幹事〕氏は徒に名のみ大なるを避けんとして之に反対し激語数日に及」んだと記す。貫幹事は大学校と名乗ることに批判的であったものの、教頭、舎監、書記、会計を幹事と兼任した。大学校は6年制のカレッジ課程を有し英語による高等普通教育は学生に満足を与えるものであった。1887年になると大阪英和学校と合併し14名の転入生を迎えた。その9月、貫は山口に帰郷、貫が一手に引き受けていた舎監は波多野教授に、書記はロー博士、会計はモリスに引き継がれた。この頃、「立教大学校と三一神学校は同所に併置せられ、ウキリアムス監督は階上の僅かに二室に寓し、其崇高なる品性と謙譲なる温容を以て、学生と起居を共にせられ、大なる精神的感化を遺されたり」と貫民之助は記す¹⁰。ところがウィリアムズは1889年に主教を辞任しチャプレンとして聖書講義を担当していた立教と三一神学校も退任する¹¹。貫民之助によると、ローやモリスは学校事務の事情に精通していなかったため時代の波に乗れず学生が減少した。そこで貫元介に帰任を求めることもあったが、大須賀（石井）亮一、早川喜四郎、小林彦五郎、松本（杉浦）貞次郎たちが、三一神学校在学中の名出保太郎や杉浦義道たちと協議し、有力な日本人を招聘して校政と学制を改革するため大阪開西学館の左乙女豊秋を招こうとガーディナーに交渉した。これは受け入れられ1890年に左乙女が主監に就任、立教大学校を廃して5年制の立教学校とした¹²。

改革後の1891年5月、ヘア主教を日本に迎えて開催された米国聖公会聖では、立教学校校長のカーディナーと左乙女豊秋主監、木村駿吉教頭からなる立教学校運営委員会は、神学校入学希望者のための教育のみでなく「一般的な生徒たちの要望に応え、彼らに來たりうるいかなる天命にも適するような幅広い一般教育」こそ立教学校が目指すべき方針であると確認した¹³。同年6月にガーディナーが校長を辞任、8月に示された『私立立教学校規則』の学校の目的から「基督教主義」が消えた¹⁴。

1892年7月になると、ティングが立教学校の校長に就任した。ティングは、

同年12月に、米国聖公会の海外ミッションに宛て、立教が「日本における教会の活動の枢要部であり、その活動は、ミッション全体の枢要部」であること、立教学校の目的は「聖職に向けて、あるいはその他の専門職に向けて準備をしている青年に、キリスト教と教会の影響のもとで良質の一般教育を施すこと」であり、実質的にはアメリカにおける教会経営のカレッジと同じであるがその重要度は比較にならないほど大きい、と述べる。なぜならアメリカでは聖職者や人々の指導者となる教養ある一般信徒を育てるための訓練の場が教会カレッジをはじめ一般のカレッジや総合大学など多くあるが、日本では諸学校は反キリスト教の影響が強硬であるため、教会みずからがミッション・スクールを訓練の場として提供しなければならないからである。さらに、立教はカレッジと名乗ってはいないが実際にはカレッジに相当する活動をおこなっており今後それを徹底していきたい、と報告する。立教が成し遂げようとしていることは、「教会全体の事業である」のでこれを全教会員のものとして「思想や祈りのなかにそれを留めておく」よう求める¹⁵。

1894年6月、東京は大地震に見舞われた。その明治27年春に設置が公表されていた大学にあたる専修科が9月より実施される。

そこに信仰復興運動の中心となる永野武三郎（1877～1898）が立教学校の3年に編入し、彼と「断金の盟（ちかひ）を結んだ」稲垣陽一郎（1876～1949）も立教学校に入学、池澤駿太郎¹⁶（1876～1956）たちと翌年、雑誌『廿八年』を発行し、「十字同盟」を結成した。すると、「寄宿舎の一室に燃ゆるごとき祈禱会が朝夕開かれ」るようになり、「寄宿舎の各室を歴訪して膝結^{ママ}の伝道を試み」る熱心な者もあらわれた¹⁷。

2. 立教学院ミッションの結成

寄宿舎で生徒たちが伝道活動を展開していた1896年9月のこと、ティングは大阪英和学舎時代の教え子であり、10年にわたる米国での留学と研鑽の生活を終えて帰国した元田作之進（1862～1928）を立教学校チャプレ

ンとして「学内宗教活動振興のため」特別に招聘した¹⁸。

元田は、学生たちによる信仰復興活動が盛んなのを見て、これを用いると同時に、「青年の燃えさかる意気を聖公会流の軌道に載せて指導すべき必要を察した」。そこでキリストとその公会に奉仕する新しい団体を創って青年の活動を教会に結び付けようとした¹⁹。

1897年、元田は、「学生中より厳選せる一部少数の特志者の団体たる」St. Paul's College Mission、立教学校ミッションを誕生させた。使命は「学院の内外に伝道と奉仕とをつとめんとする」ことであった²⁰。その使命に沿って、元田は、立教学校ミッションの活動を、第一に、東京にある聖公会の教会の日曜学校を補助すること、第二に、幻燈をもって教会のはたらきを助けること、第三に、音楽隊をもって諸種の集会を助けることとした²¹。メンバーには厳かなる入園式をして番号入の銀製小章が与えられた。「創立当時にはNo1総理、No2は池澤俊太郎、No3は稲垣陽一郎、No4若月麻須美、其他宅間〔六郎〕君貫〔民之助〕君等之に次いだ」。秘書と主計を稲垣が、書記を若月が担当した。稲垣の言葉によれば、ティングの下、直ちにチャプレンとして「学生の宗教的教養」に盡し、その「黒ガウン姿にて簡潔にして、理路頗る明快なる教話は我らの耳に新鮮」に響き、「多年米国大学生生活に得たる経験を築地に応用して、種々学校の宗教生活に新活気を鼓吹した」²²。

折りしも1895年に結成された世界学生キリスト教連盟の一員に加えたとの意向をもって世界学生キリスト教連盟総主事のJ・R・モットが1896年11月に初来日し、日本学生基督教青年会同盟をつくり、世界学生キリスト教連盟に結び合わせて国際的な組織の一環としようと思いを燃やしていた。モットは無神論的な官立学校の精神風土にキリスト教を広めることが重要だと考えていた²³。1897年1月、全国組織としての「日本学生基督教青年会同盟」が結成された。翌年1月、全国組織としての「日本学生基督教青年会同盟」の結成に立教の学生たちは熱心に取り組んだ²⁴。立教学校ミッションのミッション員に選ばれた生徒たちは学内のキリスト教組織

でも活躍した。1898年12月に発行された同盟の機関誌『青年会同盟』には、若月は関東東北部会に代表者の一人として出席したり、立教学校青年会でも若月が通信員を務め、稲垣や宅間、貫などが各級代表者になったりとミッション員の氏名が見出せる²⁵。

1896年4月、新栄町の仮校舎を用いる立教学校は、立教専修学校と、中学校令に準拠し申請をおこない認可を待つ立教尋常中学校とに分かれていた。1897年9月には神田に東京英語専修学校が開かれた。ティングは10月、病のため校長を辞任した²⁶。11月には立教の理事長マキム主教（John McKim, 1852～1936）によってA・ロイド（Arthur Lloyd, 1852～1911）が校長に就任した²⁷。

立教学校ミッションは、元田の提案で月刊機関誌『築地の園』を1898年3月23日に創刊した。第1号は、「立教学校ミッション」設立一周年を記念して、その働きを感謝をもって回顧する号となっている。

「牧師報告」においては、元田が「生徒間の道徳的及精神的状態」を立教の宗教生活の観点から報告した。1898年1月発行の“Church in Japan”に掲載されたものの邦訳である²⁸。それによると、生徒72名のうち信者は約37%の27名であり、その内、9名は神学候補生、さらに4名の洗礼志願者があった。「〔三一〕大会堂礼拝式」への生徒の出席は自由に任せているから毎日の早晚祷式にはほぼ15人。日曜日早祷式には在舎生のほとんど総てで晩には半分くらいの出席がある。毎日午前9時より寄宿舍内の一室で、讚美歌、聖書朗読、祈祷から成る生徒が交代で司会をする簡単な「宗教的集会」を開いている。また、ある上級生が教える聖書研究会がある。「青年会」は、全信者によって組織されて、知名の士を招いて大会堂会館で公会を開き、他の青年向けの伝道会と、毎日一回校内の一室で各個の信仰と品性の高めるための修養会とを推進した。「十字同盟」は毎日曜日の晩、舎内に集まって寮生のために祈り伝道した。「カレッジ、ミッション」すなわち、立教学校ミッションについてもその目的を掲載する。

元田は立教学院ミッションをはじめ、学生たちの自主的な宗教活動や文

武会も指導した。元田は「立教学校生徒の精神的なること及び宗教的運動に於ける嗜味と熱心」は他のミッション・スクールに劣らず、「学校の徳風」については、品性改善のためとって両親から委託された三人もの生徒が日を追って従順になる実例を取り上げ、舎監その人の徳と「生徒間に充てる精神的空気の寄する所」が大きい、とキリスト教活動に基づく道徳的・精神的雰囲気による教育力として紹介している。このような宗教教育についてロイドは1898年3月31日付けの立教学校の季末報告書において、「元田博士は大変に尽力しました（当校の活動の宗教の部分について触れる際には、彼についてさらに多くを語らなければなりません）」と評価している²⁹。

「築地の園日録」には1月の初週祈禱会と開校式の記事がある。祈禱会では、個人や教会の信仰、教会について、国民生活や生活の場としての家庭や学校、日本と世界に目を向けた伝道が題目として掲げられ、司会者や出席者にはミッション員の池澤駿太郎や稲垣陽一郎の名も見え、祈禱会をリードしたり代表して祈ったりしている様子が見えがえる。その後、1月10日に開校式が催され、元田牧師、ロイド総理、ウッド教授の談話があった。同誌の「個人」欄には、元田作之進が、これまで教授を兼ねていたが今学期から専任学校牧師として働くことになったこと、ただし専修科の社会学のみはこれまで通り担当すると報告されている。ロイドについては、辞任していた前総理ティングの後任であり、「今は寄宿舍の一室に吾等と共に住めり」とある。ロイドと息子クックが寄宿舍に入ったのは開校式の翌日11日のことであった。21日は総理ロイドと新来のウッドの歓迎会が中学および専修科の各級長が発起人となって六角塔下で催された。中学生を代表して葛西、専修科生より和田が歓迎の辞を述べ、ロイド、ウッドから答辞があった。その後茶菓の饗応があり、若月が司会をした。歓迎会の翌日の22日、ロイド総理が主となって寄宿舍文学室に英語会話会である「英話会」が午後7時より1時間開かれ、12、3人が集まった。「大に面白し」とある。長く立教中学の宗教文学の勢力を助長してきた歴史ある雑誌

「二十八年」第14号が、1月25日に寄宿舎二十八年社より出版された。当時の記者は宅間、和田、若月の三人であった。また学校牧師から、三大会堂に於いて日曜日以外、毎日午前七時半より朝祷式と簡単な説話があるので出席を促す告示があった。司会の順序は月曜日が小林長老、火、水、金は元田作之進、木、土はロイド総理となっている。この告示の内容についてロイドは「当校のキリスト教活動に関してはいくらかの進展に気づき得ると、私は思っています」と述べている³⁰。ロイドは立教学校総理に就任早々、開業式の翌日に寮に住み込み、生徒たちの歓迎を受け、さっそく英会話の会を開きキリスト教教育においても積極的に生徒たちと交っていたことがわかる。

このように『築地の園』は牧師や学校総理たちとともにある寮生の生活を生き生きと今日に伝える媒体ともなっている。元田の指導の仕方について、ミッション員の若月麻須美は、聖公会には、子分を率いて一旗幟を立て一党派を作る親分というものがなく、それは教会が経営する学校にもおよび、「学院の改革若くは信仰の覚醒などが、常に学生によりて成された事は囑目に値する」ものであり、「青年会或は学院ミッション等の働きに於ては学生自ら之に当りしが、然かも先生は少しも干渉する事なく、各其天分を盡くす事を得しめ、陰に陽に之を庇護保育された事は言ふまでもない」と回想する³¹。

Ⅱ. ミッション員の日曜学校への奉仕

1. 日曜学校への派遣

立教学校ミッションは日曜学校事業への応援を事業の一つの柱としていた。最初期の立教学校ミッション員は13名、安田勝吉、宅間六郎、若月麻須美、池澤駿太郎、和田正興、稲垣陽一郎、玉置道三、篠原迪、永野武三郎、植田内蔵吉、清田龍之介、榊弘次郎、大串與作である。このうち、永野と植田、清田は病気のため転地療養中であった。

ミッション員は自らを「年少農夫等」と呼び、「年少経験に乏しく、唯

主の恩を信して、涙と共に播きし種を、よろこびと共に、蒔入れし其結果の以外なるを見よや」と喜悅の言葉を掲げている。「立教学校ミッション」が荒れた地を肥やすために、祈りと愛を鋤とし犁としてまず着手したのは、東京にある聖公会の各教会における日曜学校事業をたすけることであった。ミッション員に触発されて、教役者や日曜学校関係者によって「日曜学校教育会」が、立教女学校の姉妹によって「日曜幼稚園」という日曜学校編纂事業が興った。

ミッション員は、ウィリアムズやクーパー、ブランシェーといった立教の草創期に伝道していた宣教師や、ウッドマンやロイドなど立教のキリスト教教育やキリスト教運動にかかわる宣教師にゆかりの深い教会の日曜学校に派遣された。『築地の園』第1号をみると、三一大聖堂に安田勝吉、宅間六郎、若月麻須美の三人、神田教会³²には池澤駿太郎、約翰教会³³には和田正興と稲垣陽一郎、博愛教会には玉置道三、諸聖徒教会³⁴には篠原迪と若月麻須美、親愛舎³⁵には池澤駿太郎が派遣されている³⁶。

2. 日曜学校の聖歌

日本で初めての児童用の讚美歌は1888年に十字屋から刊行された『童蒙さんびか』と見られている³⁷。永野武三郎は在学中に三一教会の日曜学校の降誕祝会のために“Happy Day”、「三一教会日曜学校降誕祝会」と題する聖歌を1896年に作詞した。『築地の園』第8号の表紙見返し裏に掲載されている³⁸。これは、永野のほか三人の学友とともに英語教師ミス・トマスの指導のもとで祝会で歌われた³⁹。

また、日曜学校事業については、当初より継続してきたものをますます発達させたいとの決意も新たに、立教学校ミッション創立第二周年にあたる1899年の『築地の園』は、三一日曜学校降誕祭の祝会のために「天使の歌“Away Away”」という池澤駿太郎が作詞した聖歌を掲載する⁴⁰。1898年は12月24日に親睦会を兼ねて三一会館にて午後6時より開かれた三一教会日曜学校降誕祝会は小田原町日曜学校連合で開かれ、少女たちが暗誦したり

唱歌を歌って人びとを感心させた。菓子や蜜柑の饗応があり、小林〔彦五郎〕牧師が日曜学校優等生に賞品を授与し、岩佐校長の奨励があった⁴¹。

3. 日曜学校の教授方針

日曜学校に関わるなかで日曜学校の生徒のための聖書研究や教授方針がミッション員によって取り上げられる。

1910年1月号の『築地の園』第119号では大嶽夏泉が「日曜学校教授方針及程度」と題して教授方針について述べる。「現今著しく日曜学校問題の研究せられ又論議せらるゝに至れるは吾等主の福音を宣伝せん為めに特に選ばれしものにとりて試に喜ぶべき事」と述べる⁴²。

ところで、第1回目の全国日曜学校大会が東京芝教会において1907年5月10日から12日にかけて開催され、日本日曜学校協会が誕生していた。1909年の第3回目の大会では三戸吉太郎の動議により11年制級の教科書編纂が決議された。11年制は、幼稚科2年、初等科3年、中等科3年、高等科3年から成る。教科書の編纂を任された文学委員長の田村直臣はほとんど独力で『何々科教師之友』と題して一学期分ずつ作成し、1912年に完了した。欧米でも児童の発達に合わせて進級制をとり国際級別教案を編纂する必要が認められ1908年に決議されたもののまだ教案出版には至っていなかった⁴³。

大嶽は、「吾人は出来得る限りの時間と労力とを捧げて日曜学校を其理想に到達せしめむと勉むべきなり」と決意を表明する。日曜学校と普通教育を比較し、日曜学校は普通教育を補うものであり、普通教育は智的発達をおもな目的として教授し、日曜学校は精神的発達を目的として宗教的教授をなすものと位置づける。「吾等当局者」は日曜学校をひとつの学校とみて、教授の方針を定める、とする。学校といっても普通教育と同様ではないが、「一定の方針を定め其に児童の智力特に宗教心発達の程度に従」って教育をなすのがよい、と考えている。その際、日曜学校の教授方針や程度はそれぞれの日曜学校によって異なるはずだ、というのが大嶽の見方だ

ある。なぜなら、日曜学校の生徒は普通教育のように日本では一定していないし、特にキリスト教的家庭に生まれた児童と非キリスト教の家庭に生まれた児童とではキリスト教に対する智識においても宗教的感化をうけた点においてもその程度に大きな開きがあるから、と述べる。

また、キリスト教的家庭ではない家庭でも、宗教的な家庭と比較的非宗教的な家庭とがあり、どちらで生長したかによって児童の宗教心の発達の程度や宗教的智識には差異がみられる、と続ける。さらに、比較的成人してから宗教的感化を受けた者を(1) 永く宗教的教育感化をうけつつその智識や宗教心の程度の低い者、(2) 智識や宗教心の発達が非常に著しい者、(3) 比較的成人してから宗教的感化を受けた者の中であまり発達していない者、(4) 幼少の時より感化を受けた者よりも発達の著しい者という相違に基づいて分類する。結論として、日曜学校の生徒は智力、宗教心の発達の程度、特に宗教的智識に種々の相違が認められるゆえ、日曜学校において一定の教科書をつくっても不適當なものにしかならない、換言すれば全日本の家庭がキリスト教的家庭となって児童を感化するまでは一定の教科書は不当である、ということになる。けれど教科書そのものが絶対的に不当だとういうのではなく、また、その事業に当たった人たちに感謝するものであるが、現状に即せばもっともよき参考書ではあっても、あるいはある日曜学校においては適用されるものであっても、大嶽自身は直ちにこれを採用できないとする。日曜学校をひとつの学校とみなす以上はその学校に適する教授方針や程度を組ごとに定めなければならないとする。まず、教授方針とその程度の大略を定め、しだいに発達して完全な教授細目もできてきて、そうすれば時代の発達につれて教科書も定められる、との見解を示す。

そのようにして分けられた日曜学校の各組の子どもたちは、1909年12月25日に三一会館で午後6時より開かれたクリスマス祝賀会第1部において、男子一ノ組の杉野史郎が祝辞を述べ、幼稚科生徒一同が暗誦し、男子二ノ組の永田謙杖が演説し予科の生徒一同が唱歌「雲」を歌った。さらに

男子一ノ組の生徒一同による聖詩暗誦、女子四ノ組の生徒の賞品授与があり、生徒一同で唱歌を、参加者全員で聖歌第40番を歌い、第2部では研究生が唱歌「三つの蝶」を歌った⁴⁴。

4. 元田作之進の『築地の園』への寄稿

ここで元田が『築地の園』の寄せた文章を見てみたい。元田は、『築地の園』の「園のマナ」に、1900年には「十二使徒」、「新約の人物」、翌年には「四福音書のキリスト」、1904年からは「神の存在論」を連載し、1909年には「新年賀状」「閑中静思」「進化論と基督教」と題する文書を寄せ、翌年から1911年にかけて「求道者に与ふるの書」「未信者に与ふる書」「基督信徒に与ふる書」をそれぞれ連載する。

後に一冊の本として出版された「求道者に与ふる書」には、元田は生命の問題についてキリスト教から共に聴くという姿勢で語りかけている文章がある。「靈魂」と題して、「宗教問題は靈魂問題である」として、身体のほかに「靈魂の存在を信ぜなければ宗教問題は初めより起る訳がない。若し人間の生命が身体の滅亡と共に無くなるものとすれば、人間は誠に墓なきものである、〔中略〕身体の死亡が人間の凡てを無くするものであるならば、人間は誠につならぬものと云はねばならぬ。長くても百歳である、〔中略〕然るに身体は人間の凡てゝない、身体の外に靈魂がある。是れが基督教の主張である」と述べる。つづいて身体と靈魂との関係について展開し、「身体は神の宮殿と唱へられて」いるので身体を大事にすることはキリスト教の精神であると説く。才能、智識、其他宗教道徳に関する高尚な観念は靈魂の所有物である。その靈魂のためになるかどうかが基準となる。「快樂安慰」を目的とし、財産や爵位、権力を手段とする身体が、財産などを「善い事に」用いようとしているのか、その規準に照らして判断する必要があるという。身体には養生が、靈魂には聖靈という「神聖なる精神を常に呼吸すること」が求められる。身体には運動が必要なように靈魂には常に善事に活動させることが欠かせない、と述べる。そのような「身体と靈魂の

未来」に関して元田は語っていく⁴⁵。次号では、「未来」と題して、身体の死後ものこる靈魂の未来あることをおもって現在大切なことを段階をおって説き、「基督の力に依て人の靈魂は天国の樂を受くことが出来る様になつた」と結ぶ⁴⁶。このような元田から学生をはじめ、さまざまな状況にある日曜学校の子どもを担当する教師たちも、信徒たちも学んだのではないだろうか。

Ⅲ. ミッション員の立教の制度への変遷時にあらわれる立教観・教育観

1. 立教の「宗教的生命」

『築地の園』には「宗教的生命」に言及した論考がある。初めに見られるには、1898年に中学校令に基づく尋常中学校として認可をめぐってである。申請中の尋常中学校が認可校となるのは1898年4月のことであるが、これに教会側は当初反対し、ミッション員は「校内の宗教的生命」の問題として憂慮する⁴⁷。

『築地の園』は立教尋常中学校認可申請をめぐる動向に着目していた⁴⁸。認可校となることへの懸念の声は1898年発行の『築地の園』第2号に「立教尋常中学校の認可と校内宗教的生命」と題する無記名の文章によってあらわされた。立教尋常中学校は立教学校の「僅かに其一部のみ」で今日まで学校の宗教的生命の中堅は立教専修学校にあった、校内の宗教的生命は主として純然たるミッション・スクールであり日本聖公会の教役者を伝道会に輩出する立教専修学校にあり、伝道会社の学校設立の根本の主旨に照らせば立教学校の現在および将来のために中学校よりも更に大きな熱心と注意が専修学校に注がれるべきである、中学校の宗教的生命の保持進捗は専修学校に依存する、という内容であった⁴⁹。

『築地の園』では、認可後の中学校について、中学校認可の後学生数は非常の勢を以て膨張し、広告してから日ならずしてたちまち100人を超えさらに増えるので、専修学校の教場は寄宿舎文学室に移された、と伝える⁵⁰。一方、専修学校の存廃論の成り行きに留意する。5月9日はこの日

に開かれるはずの聖書講義会が、元田が立教学校理事会出席のためこれがないので休みとなった。それは理事会で「専修学校存廃論」が喫緊の課題となっているからであり、一人から二人の英語選科の通学生のほか二人の神学生候補を教育しているだけなので二人を神学校に移すという説もあるが、専修学校の存廃は「立教学校宗教的生命」より見れば容易ならざることなので、特別調査会として左乙女、小林、清田、ロイド、ウッドマンが選ばれ、在学中の候補生等も意見書2通をマキム監督に提出した、と報じる。その存廃の決定について「吾曾は立教学校現在及び将来の宗教的生命の爲尤も善き方策の施されんことを祈るものに候」という願いが記される⁵¹。さらに、6月3日に学校理事会が開かれたが専修学校問題特別委員会の中なかで病気が人があったので決議は来月例会まで延期された、とその経過を追っている⁵²。

その後、立教は1899年の宗教教育禁止訓令とよばれる文部省訓令第12号への対応過程で、宗教教育は、認可中学校である立教中学校ではおこなわれないが、中学校校長が寄宿舎の舎監を兼ね、宗教教育に責任をもつ、という陳述書を東京府学務部教育局に提出することになる。教育局からは寄宿舎の責任は立教学校総理が負うこととするとの回答があり、これに基づき寄宿舎は中学校校長の元田ではなくロイド総理の名義となる。1900年1月に発刊された『築地の園』には、立教学院という、立教学院専修学校と立教学院立教中学校、立教学院英語専修学校（神田）及び夜学校（築地）、立教学院専修学校寄宿舎東西寮といった園の諸学部を総称する新しい名称が誕生したことを報じられた。ここに立教学校ミッションは立教学院ミッションとなる。同号の『築地の園』は「立教学院ミッション総理 立教中学校長哲学博士元田作之進君」として元田の写真を掲げた。この訓令第12号に伴う学校内の宗教教育問題について、元田は晩年、「此出来事は私が学院ミッションを組織した後の事であつたが、此出来事のあつて以来一層此ミッションの力に依つて立教中学校の学生に基督的気分を造らしめよふと思ひ詰めたのであります。今日立教大学宗教科に教鞭を取つて居らるゝ

稲垣、貫両長老の如き、又青森の宅間長老の如き学院ミッションの初期に於て大に活動せられた青年でありました」と回顧している⁵³。

「宗教的生命」という次に言葉が登場するのは10年後の貫民之介による1908年発行の『築地の園』第100号に掲載された「立教学院小史」である。このなかで貫は、「校内における宗教的方面」に関して、立教の宗教的生命は信徒個人のなかにあり、学校主導ではなく学生のなかから活動となって起こり種々のグループを形成した、と述べる。「宗教的生命は形態の中に存せず、到底信徒各個の衷に存す。故に聖書研究の事祈祷会の事、学校のなすを待たずして早くより学生の間に行はれたり。此頃に至りて宗教的生命は一層の活動を致し、修養会となり基督教青年会となり、十字同盟となり、立教学校ミッションとなれり、これ皆学生の中に成りし所」と「宗教的生命」が学生の自主的なものであったと強調する。ところが、訓令12号に対応して立教中学校がとった認可校として存続する方針を東京北部地方伝道区の宣教師会議や地方会が承認した際には、「立教専修学校の存し、且つ信徒学生が校内に於ける善感化の基礎たりし当時の事情見て斯る有望的の決議に及びしものなりしが、其等の良風を以て当局者自身が働きにて為し得たるものと誤認せし嫌なきにしも非ず」とその自主性が理解されていなかったと指摘する。それは、「寄宿舍の状態」に関連する。立教学院の名を起し立教学院寄宿舍の名を設けたが、立教学校時代は、到底学校の事業ではなく、自治制で和気藹々として皆兄弟のようであった。当局者がもとは信徒有志のものをわがもの顔に誇るのには笑止であるし、統計に入れて形式を強めてきたので宗教的生命が鈍ってきたのに加え、近来は聊か軍隊的になってきた、と憂う。ただしウオーク教師が寮生と共に暮らし信徒の信仰を励ますのは喜ぶべきこと、と評価する⁵⁴。

寮に関しては、1905年に貫民之介の「立教学院に対する余の希望」と題する『築地の園』に掲載された論考でも言及されている⁵⁵。このなかで寄宿舍について、貫は、今の学院に欠けているとか備わっているとかいうのではなく、理想的状態についてミッションスクールの寄宿舍はクリス

チャンホームでなければならないこと、その要件は学課的聖書研究が行われることでも宗教講演に家族が強いて出席することでもなく、温かいクリスチャンスピリットが溢れ流れていることである、と説明する。ホームは教会のものであるので、ミッションスクールの寄宿舎なるものはクリスチャンスピリットが溢れるために信徒である舎生の宗教的熱心を盛んにし持続させるために、陰に陽にその活動を輔け、その真摯を阻害しないことであって、宗教的事業を権威的に起こすのは「よしあし」で、ホーム的精神の害となる。教会の集会があるときに他の集合を命じたり教会に対して定めたことだけ行えばよいとするのも信徒さえ教会に遠ざけるようなことをしてはいけない。強制的宗教運動はクリスチャンホームの本旨に悖るのみならず宗教の本義にも反する大なる誤謬、と断言する。伝道は寄宿舎のことではなく、教会のことであり、信徒各自のことである、と主張する。

寮は学生の自主的な伝道活動の拠点であり、立教専修学校は「宗教的生命」の場であった。貫は、「立教学院小史」において、1900年代初頭にいつの間にか閉校した立教専修学校は教界や社会のために立教学校が理想とする人格を作り出すというミッションスクールとしての立教の職責の大部分を担うはずであったが、中学校の隆盛に力がそそがれその主要部分がおろそかにされた、とみている。「学生は一名にても可、教授必ずしも多きを要せず、只肺肝を傾注する底の教育を施さんこと」が立教に嘱望される、と述べる。専修学校の役割を受け継ぐのは1907年に専門学校令によって設立された立教大学であるとこれを慶賀する。教育は「一人の一教授と一人の一学生と一脚の机とあれば則ち足る、要するに肺肝を注ぐ底の教育家」が「人格を傾注」して教育にあたる必要がある、と強調する。

2. 『築地の園』は「立教学院の長児」

1922年5月、立教大学は大学令としての大学に昇格した。『築地の園』は274号まで刊行されて一時中断していたが、元田の提案により1922年12月より池袋の立教大学において四季刊行で再興することが決まり稲垣が編

輯担当となった。このとき、元田や稲垣の考えが一致し『築地の園』という誌名のまま発刊された。元田は、「築地の園復活」のなかで中学と大学とは法令上からみれば全然別種の教育機関であるが、設立者の精神においては同一機関の二分体で、一つは築地に、一つは池袋に発展しつつあるに過ぎないと考えていた。稲垣は「築地の園」は立教中学校よりも先であり、立教大学よりもはるかに古く、「立教学院の長児」と立教学院ミッションを位置づけていた⁵⁶。立教の精神とはたらきをウィリアムズ以来、脈々と受け継いでいるという自負がうかがえる。続刊して間もなく、1923年に日本聖公会東京教区監督となり立教を去ることになった元田は立教学院ミッション総理の任をミッション員のC・S・ライフスナイダー（Charles S. Reifsneider, 1875～1958）立教学院総理に譲った。

3. 関東大震災後に語られる立教の教育

1923年の関東大震災で築地の中学校は壊滅状態となり、池袋に移転することになった⁵⁷。1926年の5月5日の立教学院創立記念日に立教中学校の新築落成式が行われた。『築地の園』は、財団法人聖公会教育財団委理事長を務めるマキム主教の「設立者としてのあいさつ」を掲げる。マキムは、1880年に立教学校で教鞭と執ったものの一人として新校舍落成を中学校後援会や政府に謝し、「元来立教学院本来の目的は基督教主義に基く人格教育にある」と述べた⁵⁸。同じくその席で立教学院総理・立教大学総長ライフスナイダーは、「『立教』々育の本旨」と題して「本校の教育は元来三の要点に着目している。即ち体育・智育・霊育である。〔中略〕智育に就ては、勿論本校の最善を尽し来れる所である。されど本校教育の眼目点は霊育にある。即ち基督教主義によれる人格教育である。体育智育共に肝要なるは云ふまでもない。されど霊育を怠りては、真の人格教育は達成せられない。力ある宗教教育なき所には力ある人格教育を期待し得られない。〔中略〕現下の日本の憂の一は種々の危険思想、過激思想の侵入である。〔中略〕本校が基督教の人格教育を標榜して、最善を尽しつゝあるは、奉公の実を

挙げんとするに外ならぬ。さればとて本校は決して学生生徒に基督教を強んとするものでないことを十分に諒せられたい」⁵⁹と述べ、キリスト教によって初めて実現される人格教育を「靈育」とよんで立教の目指す教育を指し示し、そのようなキリスト教的人格教育をもって日本の直面する教育の困難に奉仕しようという立教の姿勢を明確に打ち出した。

これに先立ちライフスナイダーは年頭に、「神と国の為 “Pro Deo et Patria”」と題する文書を「新年メッセジ」として『築地の園』に寄せ立教大学の「楯」に表現された立教の教育の理想と意味を説いた⁶⁰。

このメッセージにつづいて『築地の園』は、1925年11月に池袋キャンパスの諸聖信徒礼拝堂修復感謝礼拝説教において立教大学チャプレンで1927年にミッション員となる⁶¹山縣雄杜三がおこなった「立教の三兄弟」という説教を『基督教週報』から転載して掲げる。山縣は、三兄弟の一人は智育を象徴するライブラリー、一人は体育をあらわすジムナシウム、全快に時間を要したもう一人は「我が立教の特殊な色彩をもつ徳育」であり、「立教の心臓」と紹介されることのあるチャペルである、と述べる。チャペルについて、「教育とは引出すことだとして此の青年は人間にある神元素を引出し他の諸要素を之れに聖別せずんば教育は仮令それが最高学府と誇称する大学教育であらうが全然の失敗だと此の青年は確信してをる、自己を偶像とし主我を原則として生活し此くて自から播きし果の呪を収穫して懊悩煩悶する人の充つる世の中に臆せず、彼は歩み出して十字架を我が生活の第一原則として犠牲の大道を説き、説く所を行つて社会生活の調子を高め人に品性を与へ平和の神の国を人の子の間に建設せんとする」と語る⁶²。「徳育」はチャペルに象徴され、社会生活や人の品性、神の国を広めるのに寄与するという立教の教育の独自性を確かにするものであった。なお、震災前の池袋のチャペルの切妻屋根破風部分に飾られていた十字架のひとつは現在新座キャンパスの聖パウロ礼拝堂の側に配されている。

おわりに

これまでみてきたように立教学院ミッションの結成は、元田を立教学校チャプレンを据えたティングの功績が大きい。元田は『築地の園』において、「私が米国より帰りて立教学校の教師兼チャプレンとなつたのは明治二十九〔1896〕年九月でありました。〔中略〕チング先生と左乙女先生は私が洋行前大阪の英和学舎に於て勉強して居つた時の先生であつて、此両先生の許にて働き得る様になつたことを大に喜んだのであります。〔中略〕立教学院の歴史を語るものは決してチング氏の名を忘れてはならぬと思ひます」と語る⁶³。『築地の園』は、1927年10月19日ティング永眠の報を受け特集号を組む。大阪時代のウィリアムズの仕事を引き継いだティングは、元田作之進をはじめ築地の三一教会の司祭として度々『築地の園』に登場する名出保太郎、小林彦五郎⁶⁴、立教の左乙女豊秋たち大阪バンドと言われる信仰者を育てた⁶⁵。そのなかには立教の学制改革にかかわった者もいた。元田は学生たちの信仰復興を聖公会に沿ったものに導き、立教を歴史を繙くに当たってもミッション員の日曜学校への取り組みを知る上でも重要な資料ともなる立教学院ミッションの機関誌『築地の園』を発刊し、その復刊にあたっては中学校も大学もひとつの立教の精神に依ると述べた。小林は、ティング追悼の『築地の園』で、ティングが日本の伝道も教育も日本人によつて為さるべきものであるという考えに基づいて伝道も教育も実行していたと語る⁶⁶。聖職者がカレッジで学生と接すること、伝道と教育は日本人の手に委ねられるべきというティングの伝道観や教育観は元田たちによって現実化された。ティングは、名出に「元田氏一人を得た事は大阪の英和学舎を建てた価値があつた」と述懐した⁶⁷。元田は、1928年4月10日に大阪で開かれた「チング長老記念追悼会」で代読され『基督教週報』に掲載された「故チング氏と予の関係」のなかで、「予は明治15年12月25日此場所に於て同氏より洗礼を受けて以来、絶へず同氏の温情を受け、其指導に預り、師弟の関係と云はんより寧ろ父子の情を以て愛し愛されたものである」ゆえ涙をもって追悼する、と記すのであった⁶⁸。追悼会から一

週間もたたない、ティング永眠から約半年後の1928年4月16日に元田は師の後を追うかのように永眠した。ティング記念号の次号にあたる『築地の園』は立教学院ミッション創立者を追悼した。

この頃、社会的キリスト教運動が盛んになり、海老沢によれば学内のキリスト教運動は「少なくとも大学が昇格して以来、最高潮を示した時」となった。立教学院ミッションの草創期をおもわせる立教大学ユニヴァーシティ・ミッションが管円吉のもと1926年に結成され、1927年春にはポール・ラッシュの指導で聖アンデレ同胞会の立教チャプターが生れた⁶⁹。1931年8月に成立した財団法人立教学院はその寄付行為に「日本に於て基督教主義による教育を行ふを目的とし」と掲げ、この目的は変更を許さないとした⁷⁰。また1932年には、北川台輔たちを中心に各教派のクリスチャンたちが母校の精神を「神と国とのため」に最善を尽くすことによってあらわそうとライフスナイダー総長を名誉会長とし、高松孝治チャプレンを会長として立教クリスチャン・アーミーを結成した。このような大学昇格後のキリスト教運動の興隆期を支えたのは、立教学院ミッションのミッション員でもあった。興隆の要因として、1927年に中学チャプレンに前島潔、1929年に大学チャプレンに高松孝治が就任し、ライフスナイダー総長邸において杉浦貞次郎学長事務取扱、小島茂雄中学校校長をはじめとする学院教職員による宗教懇話会がつづけられていたと海老沢は指摘する⁷¹。

そこには立教学院ミッションの活動方針の見直しがあった。1927年6月に在京立教学院ミッション員集会において、大学や中学で宗教運動が盛んなので立教学院ミッションは今後は中・大学の職員間の伝道を主とすると決定し、宗教懇話会の開催に背景において尽力すると決めた⁷²。ライフスナイダーは立教学院ミッション総理、高松孝治は立教学院ミッションでは1909年には伝道部主任⁷³、1910年には日曜学校部⁷⁴を担当した。小島茂雄は、高松と同時期の1909年に日曜学校主任と雑誌部主任を兼任⁷⁵、1910年には秘書兼書記、雑誌部員であり、高松と共に日曜学校部も兼任した⁷⁶。北川台輔はミッション員に推薦されていた。

1932年になると立教学院ミッションはさらに活動のあり方を変える。1932年2月にライフスナイダー邸で開かれた立教学院ミッションの総会では、小島が「学院に対する直接の働きとしては、既にS.P.M〔立教学院ミッション〕は其任務を果たした」として、総理を中心とした信仰による友情と社交の団体として、□と教会の為め各人の持ち場でその働きを発揮すべき、と述べ、一同大賛成するところとなった。1931年5月300号で『築地の園』の編集は稲垣の手を離れ、その後高松に委任されていたが、ほとんど学生に読まれていないという話なので刊行されていなかった。他のミッション員から中学生にはそのような雑誌が必要という意見が、総理からは資金援助の申し出があり、小島がパンフレット（St. Paul's Mission Pamphlet）発刊を提案し創刊が決定された。1933年に立教学院パンフレットの第1篇として高松が『科学全盛時代の神』を著したのをはじめ、1934年までに5冊が刊行された⁷⁷。

前島はこのような経緯のなかで『立教学院宗教運動の過去及現在』の筆を執った。小島茂雄はそのなかで「幻滅なき時代を追想して」と題して寄稿し「今日は幻滅が日常茶飯事で、伝統の権威も大に疑はれる時代である。僕等のミッションのイデオロギーに多少の変化が来たのもまた止むを得ない事であらう」と記す⁷⁸。立教学院ミッションで36人目にメンバーに加えられた早崎八州は、立教学院ミッションは元田もミッション員もその初期においては開拓者の精神を味わいつつ「精神上的EDUCATIONを行つた。教権に寄らず、学生々活の中から涌出し、学園の信仰生活に一つの連帯的イデオロギーを持たせるものであつた」と述懐する。立教学院ミッションがそのスピリットによって築き上げたものは「精神的脈絡の中に生活させる学校」としての「教育」の場たる立教学院である。立教学院ミッションが直接運動を中止したがそれは「長い歴史に一つのMILE STONEを置いた迄」であり、そのスピリットは各メンバーのなかに潜み、多くの人たちが「人間たるに価する生活」をするため祈り求めている、と述べる⁷⁹。

立教学院ミッションは、ライフスナイダーが立教学院総長を1941年に

辞任、新総長に就任した遠山郁三は立教学院ミッションの総理は固辞したが1942年2月から年末までは「立教大学教職員懇話会」によって立教学院ミッションを受け継いだ。戦後は佐々木順三総長自ら会長となって「立教学院基督教懇話会」として再興し1957年まで続いた⁸⁰。

戦時下、立教学院の寄附行為は変更され、基督教主義による教育が立教学院の目的として復活するのは1945年11月の須藤吉之祐と高松孝治を新任の理事に迎えた理事会においてであった⁸¹。高松孝治は戦中の1940年、「基督教主義に立つ大学の使命」と題して「人の目につかず、全く土に埋れながら凡てを支えて行く石となるべき人こそ真に興隆せんとする国家社会に最も大切な人々である。そして立教は斯る人々を作り出す最も重要な使命を与へられているのである」と語っていた⁸²。戦後の大学総長・専門学校校長・中学校校長を兼務した佐々木順三は「立教大学建学の精神は、その当初より終始一貫して、万物の創造主たる神を畏れ、その子キリストの聖言に聴くことをもつて『知識の本』(箴言一ノ七)となる基督教の根本的信仰に基くもので、あらゆる学問の研究は自然と歴史の中に啓示れた神の知恵を謙遜なる心を以つて探求し、全ての真理と善の源を神の中に見出すと共に、神の限りなき智慧によつて、人間の裏に備えられた永遠の道を会得して、人類の平和と福祉に貢献することである」と述べ、それを端的にあらわすのが「神と国の為」と言う標語であると説く。特に立教は、「神学を始め学問の軽視は教会の生命を萎靡沈滞せしめ、同時に又、宗教的精神の欠如は学問の府を偏狭、銜学に墜落せしめる」というウィリアムズ主教によって伝えられた聖公会の精神(アングリカニズム)を伝統としてもち、それによって立教大学は「自由の学府」たりえてきた、と主張する⁸³。『築地の園』に掲載されたライフスナイダーの言葉「神と国の為」はこれまでの立教精神のまとめと建学の精神の表現として戦後へ架橋するメッセージとなって受け継がれた。立教学院ミッションは元田が永眠した1928年の時点でも会員登録数は逝去した者も含めて60人⁸⁴と小さな集まりでありながら立教の建学の精神と分かち難い学風をその活動と『築地の園』の刊行

によって担ったと言える。

注

- 1 天野郁夫「建学の精神を問う」、天野郁夫（2013）『大学改革を問い直す』慶應義塾大学出版会、189～207頁。
- 2 海老沢有道「立教学院ミッションと『築地の園』」、海老沢有道編（1974）『立教学院百年史』立教学院、259頁。
- 3 稲垣陽一郎「立教学校ミッションの創立せられし頃」、前島潔（1933）『St. Paul's Mission Pamphlet No.2 立教学院宗教運動の過去及現在』立教学院ミッション、109頁。
- 4 立教中学、専門学校令による立教大学に学び、1919年より立教大学チャプレンと哲学科教授を兼任し、翌年立教中学校校長を務めたミッション員の小島茂雄（1886～1970）（伊藤俊太郎「小島茂雄」、日本キリスト教歴史大事典編集委員会（1988）『日本キリスト教歴史大事典』教文館、521頁）は、「僕も暫くの間六号活字で「愛する者よ」と言ふ伝統的な書出しをしなければならぬ「立教だより」やうのものを毎号執筆した」と回想する（「幻滅なき時代を追想して」、前掲『立教学院宗教運動の過去及現在』所収、118頁。
- 5 前掲『立教学院宗教運動の過去及現在』3～16頁。
- 6 海老沢有道「国家主義教育進行」、前掲『立教学院百年史』172～175頁。「84 1881年11・12月号 外国委員会報告付属文書B。江戸伝道主教大14回年次報告、1880年6月30日年度末。〔C・M・ウィリアムズ〕、立教学院史資料センター編（2009）『立教学院150年史資料集 THE SPIRIT OF MISSIONS 立教関係記事集成〈抄訳付〉第1巻』立教学院院長松平信久発行、306～310頁。
- 7 「83 1881年11・12月号 外国委員会報告。日本。」前掲『立教学院150年史資料集 THE SPIRIT OF MISSIONS 立教関係記事集成〈抄訳付〉第1巻』、301～305頁。
- 8 海老沢有道「維新前後の情勢と立教学校の創設」、矢崎健一「創立者ウィリアムズ主教」、前掲『立教学院百年史』162～163、173～176、82～87頁。

- 9 貫元介の長男。日本聖公会司祭となり真光教会管理司祭を務めたり、『コンオウル・リー女史の生涯と偉業』（1954年、コンオウル・リー女史伝記刊行会）を著したりした。
- 10 貫民之助「立教学院小史」、元田作之進（1908年1月）『築地の園』第100号、元田作之進、12～13頁。『築地の園』第32号の「立教学院歴史（二）」では、貫が山口学校に移り、後任として波多野一が来た、とある。なお、波多野は「監事」（元田（1901年5月27日）『築地の園』第32号、28頁）。前号からつづく「立教学院歴史」は、元田立教中学校長が編纂したもので、明治34年2月立教学院創立第27年記念会の席上で語られたものを『築地の園』の編者が記載した（元田（1901年4月）『築地の園』第31号、24頁）。
- 11 海老沢有道「日本聖公会の成立とウィリアムズの退任」、前掲『立教学院百年史』189～192頁。
- 12 貫民之助（1908年1月）「立教学院小史」『築地の園』第100号、12～13頁。
- 13 「24 1892年10月号。海外ミッション。日本ミッション報告。〔伝道主教ウィリアム・H・ヘア。〕立教学院史資料センター編（2010）『立教学院150年史資料集 THE SPIRIT OF MISSIONS 立教関係記事集成（抄訳付）第2巻』立教学院院長松平信久発行、89～98頁。
- 14 大江満「立教における日本化改革」、立教学院史資料センター編（2007）『立教大学の歴史』立教大学、45～46頁。
- 15 海老沢有道「立教学校教育の趣旨」、前掲『立教学院百年史』194～196頁。「29 1893年3月号 海外ミッション。日本の教会カレッジレベルの訓練校。〔校長T・S・ティンゲ。1892年12月、東京。〕、前掲『立教学院150年史資料集 THE SPIRIT OF MISSIONS 立教関係記事集成（抄訳付）第2巻』107～112頁。
- 16 池澤駿太郎はティンゲ校長の下、捕手を務めていた（海老沢有道「野球部誕生」、前掲『立教学院百年史』267頁）。
- 17 前掲『立教学院宗教運動の過去及現在』34～37頁。
- 18 海老沢有道「立教学院ミッションと『築地の園』」、前掲『立教学院百年史』259頁。
- 19 前掲『立教学院宗教運動の過去及現在』、39頁。

- 20 稲垣陽一郎「明治二十九年秋第一回の帰朝を迎えてより」、稲垣陽一郎（1928年12月）『築地の園』第292号、13頁。
- 21 元田（1898年3月）『築地の園』第1号、4頁。なお、1898年の『青年会同盟』では、立教学校ミッションの事業の三つ目を『築地の園』雑誌発刊としている（日本学生基督教青年会同盟（1898年12月）『青年会同盟』第3号、立教学院百二十五年史編纂委員会編（1996）『立教学院百二十五年史 資料編第1巻』立教学院院長塚田理、590～593頁）。
- 22 稲垣陽一郎「明治二十九年秋第一回の帰朝を迎えてより」、稲垣（1928年12月）『築地の園 故元田監督記念号』第292号、13頁。ミッション員は卒業生がいると新たに候補や正会員として加えられたが卒業しても辞退の申し出があった場合を除いてはミッション員でありつづけた。1909（明治42）年4月に、稲垣陽一郎、宅間六郎、山崎馨が地方会出席のためにそれぞれの伝道地から上京し、20日の学院宿舍集会室で火曜日ごとにおこなわれていた聖書講義にかえて稲垣と山崎が講話し学生たちは傾聴した（築地の園人「園の昨今」、元田（1909年5月）『築地の園』第114号、20、18頁。）とある。稲垣陽一郎は、同1909年6月29日、聖ペテロの祝日に、午前9時より築三大聖堂において執行された長老接手式で、ロイドとともにマキム監督から長老として接手された。
- 23 奈良常五郎『日本YMCA』日本YMCA 同盟、1959年、85～93頁。C.Howard Hopkins（1979）, *John R. Mott 1865-1955 A Biography*, New York, William B. Eerdmans Publishing Company, pp.186-201.
- 24 前掲『立教学院宗教運動の過去及現在』、36頁。
- 25 前掲『青年会同盟』第3号、590～593頁。
- 26 「立教学院年表」、前掲『立教学院百年史』634頁
- 27 海老沢有道「立教学院の成立」、前掲『立教学院百年史』、217頁。
- 28 元田（1898年3月23日）『築地の園』第1号、3～5頁。元田の報告は、*CHURCH IN JAPAN* Vol. VI. JANUARY, 1898, No1（PRINTED AT THE TOKYO TSUKIJI TYPE FOUNDRY）のS.Paul's College, Tokyo の章にREPORT OF CHAPLAIN と題してJoseph S.Motoda, Chaplain の名で12～14頁に掲載。

CHURCH IN JAPAN は、築地でエヴァンス (The Rev. Charles H. Evans) によって編集された聖公会の雑誌。

- 29 「97 1898年6月号海外ミッション。日本。1898年3月31日付の立教学校の季末報告書の一部〔アーサー・ロイド。〕、前掲『立教学院150年史資料集 THE SPIRIT OF MISSIONS 立教関係記事集成 (抄訳付) 第2巻』324~330頁。
- 30 同前。
- 31 五條基督教会長老 若月麻須美「元田先生に就て」、稲垣 (1928年12月) 『築地の園 故元田監督記念号』第292号、6~7頁。
- 32 1877 (明治10) 年10月にW・B・クーパーとC・T・ブランシェーによって神田に建てられた会堂に始まる (八代崇「神田基督教会」、前掲『日本キリスト教歴史大事典』347頁)。
- 33 1876年よりアメリカ聖公会宣教師クーパーが浅草に講義所を開設、ブランシェー、ウィリアムズ自身が伝道する。(日本聖公会浅草聖ヨハネ教会百年誌編集・出版委員会編 (1986) 『浅草に召されて一浅草聖ヨハネ教会百年史』日本聖公会浅草聖ヨハネ教会、11~14頁)。
- 34 ロイドが管理していた1896年に諸聖徒教会として設立 (松平惟太郎「東京諸聖徒教会 (聖公会)」、前掲『日本キリスト教歴史大事典』924頁)。
- 35 大阪三一神学校を卒業した後藤叡吉 (1882~1931) による (松平惟太郎「後藤叡吉」同前書、528頁)。
- 36 「明治30年中各日曜学校校勢一覧表 立教学校ミッション調」、前掲『築地の園』第1号、12頁。
- 37 山本忠興 (1941) 『日本日曜学校史』西阪保治。
- 38 元田 (1898年12月) 『築地の園』第8号。
- 39 稲垣陽一郎「園詩回顧 (第三百号発行に際して)」、稲垣 (1931年5月) 『築地の園第三百号記 築地詩』、12~13頁。
- 40 元田 (1899年1月) 『築地の園』第9号、1頁。
- 41 「築地の園人」、同前書、7頁。
- 42 大嶽夏泉「日曜学校教授方針及程度」、元田 (1910年1月) 『築地の園』第119号。

- 43 前掲『日本日曜学校史』65～67頁。
- 44 築地の園人「園の昨今」、前掲『築地の園』第119号、17～18頁。
- 45 元田良山〔作之進〕「求道者に与るふ書（五）」、元田（1909年5月）『築地の園』第114号、4～7頁。
- 46 元田良山「求道者に与ふる書（六）」、元田（1909年6月）『築地の園』第115号、5～9頁。
- 47 前掲『立教学院宗教運動の過去及現在』43～46頁。
- 48 「園の昨今」、元田（1898年4月）『築地の園』第2号、15頁。
- 49 「立教尋常中学校の認可と校内宗教的生命」、同前書、1～3頁。
- 50 「園の昨今」、元田（1898年5月）『築地の園』第3号、7頁。
- 51 同前書、8～9頁。
- 52 元田（1898年6月）『築地の園』第4号、9～10頁。
- 53 元田作之進「過去の経験をたどりて」、稲垣（1926年5月）『築地の園』第284号、稲垣、7～8頁。
- 54 前掲「立教学院小史」16頁～22頁。
- 55 貫民之介「立教学院に対する余の希望」、元田（1905年9月）『築地の園』第75号、14～16頁。
- 56 稲垣陽一郎「築地の園第三百号に題す」、稲垣（1931年5月）『築地の園』第300号、1～2頁。
- 57 寺崎昌男「立教大学における『大学』への道」、前掲『立教学院百年史』270～313頁。
- 58 元田（1926年5月）『築地の園』第284号、3頁。式の挨拶の要領を筆記したもの。
- 59 同前書、4頁。式の挨拶の要旨を筆記したもの。海老沢有道「中学校の池袋移転」、前掲『立教学院百年史』316～321頁。
- 60 元田（1926年1月）『築地の園』第283号、1頁。前掲『立教学院宗教運動の過去及現在』、82～84頁。海老沢有道「神と国とのために」、前掲『立教学院百年史』331～333頁。
- 61 倉田尅・鶴川馨「立教学院ミッション職員宗教懇話会及び立教大学職員基督教

- 懇話会」、前掲『立教学院百二十五年史 資料編第1巻』550～551頁。
- 62 山縣雄杜三「立教の三兄弟」、元田（1926年1月）『築地の園』第283号、2～5頁。
- 63 元田作之進「過去を経験をたどりて」、稲垣（1926年5月）『築地の園』第284号、5～6頁。なお、元田は左乙女は数年前に東京でなくなれたという。伊沢によると立教を辞して札幌中学校長になった後の消息はわからないとある（伊沢平八郎「左乙女豊秋」、前掲『キリスト教歴史大事典』561頁）。
- 64 松平惟太郎「小林彦五郎」日本聖公会歴史編集委員会編（1974）『あかしびとたち—日本聖公会人物史—』日本聖公会出版事業部、259～261頁。
- 65 海老沢有道「大阪英和学舎」、前掲『キリスト教歴史大事典』215頁。
- 66 小林彦五郎「チング先生の思出」、稲垣（1928年3月）『築地の園 立教学院最初の総理故 ち、エス、チング師追悼号』第291号、5頁。
- 67 大阪教区監督 名出保太郎「立教学院とチング師」、同前書、4～5頁。
- 68 稲垣（1928年12月）『築地の園 故元田監督記念号』第292号、26頁。
- 69 前掲『立教学院宗教運動の過去及現在』、84～94頁。海老沢有道「SCM 事件と学内宗教運動」、前掲『立教学院百年史』345～350頁。「直筆手記（1953年）」財団法人キープ協会編訳（2003）『清里に使用して—ポール・ラッシュが書き遺した「奇跡の軌跡」』財団法人キープ協会、13～14頁。
- 70 伊藤俊太郎・海老沢有道「寄附行為改正と立教再建の精神」、前掲『立教学院百年史』394頁。豊田雅幸「財団法人立教学院の設立」、前掲『立教大学の歴史』96～97頁。
- 71 前掲「SCM事件と学内宗教運動」、347～350頁。
- 72 前掲「立教学院ミッション職員宗教懇話会及び立教大学職員基督教懇話会」、550～553頁。第1回の「宗教懇談会」は20名が集まり1927年9月に、第2回は30名出席し11月に、第3回は20余名で1928年2月に、第4回「宗教懇話会」は25名、1929年5月に開かれた。
- 73 元田（1909年5月）『築地の園』第114号、20頁。
- 74 元田（1910年7月）『築地の園』第125号の2、16頁。
- 75 前掲『築地の園』第114号、19～20頁。

- 76 前掲『築地の園』第125号の2、16頁。
- 77 「資料1『立教学院ミッション同職員宗教懇話会記録』」、前掲『立教学院百二十五年史資料編第1巻』555～556頁。パンフレットの第2篇は前島『立教学院宗教運動の過去及現在』、第3篇は飯田堯一『日本精神と基督教』、第4篇は前島潔『耶穌基督』、第5篇は若月麻須美『聖公会と祈祷書』。
- 78 小島茂雄「幻滅なき時代を追想して」、前掲『立教学院宗教運動の過去及現在』116～119頁。
- 79 早崎八州「MILE STONE」、前掲『立教学院宗教運動の過去及現在』、119～123頁。
- 80 前掲「立教学院ミッション職員宗教懇話会及び立教大学職員基督教懇話会」、550頁。
- 81 伊藤俊太郎・海老沢有道「寄附行為改正と立教再建の精神」、前掲『立教学院百年史』394頁。大島宏「『基督教主義ニヨル教育』の危機」、前掲『立教大学の歴史』137頁。
- 82 「資料6 高松孝治チャプレン・予科教授の『立教学院学報』に寄せた一文 [1,940 (昭和15)年]」、前掲『立教学院百二十五年史資料編第1巻』69～71頁。
- 83 「資料1 佐々木順三『建学の精神』」、立教学院百二十五年史編纂委員会(1998)『立教学院百二十五年史資料編第2巻』立教学院院長塚田理、45～47頁。豊田雅幸「新体制の模索」、前掲『立教大学の歴史』190～193頁。
- 84 稲垣陽一郎「明治二十九年秋第一回の帰朝を迎えてより」、稲垣(1928年12月)『築地の園』第292号、12～13頁。

(本学兼任講師)